

Aoyama Sapience

第46号



青山学院大学 文学部 英米文学科同窓会 会報

2021年12月15日発行

■ 巻頭随想 ■

記者はいわば野次馬の代表

—— いやなブン屋にならずに済んだのかどうか ——

設楽 淳二

「知る権利」。この言葉が国際的に広まったのは、社会の情報化が著しく発展を遂げたここ十数年のことでしょうか。私は何でも知りたいという好奇心旺盛さから、記者になりました。知りたい人に取材事実を紙面でつなぐのが記者の役割です。ただ、ある種冷酷ともいえる取材と人情の兼ね合いはいまもってよく分かりません。果たして取材対象・読者に行儀よく対応できたのだろうか。

「自分のことを書く時、その大半は自慢話になる」。ある著名な作家の言葉です。残念ながら取材5年の短い期間で自慢できる特ダネとは縁がありません。「日本初の心臓移植」の第一報に関わったくらいです。記者としての基本は同じながら、紙面を編集する整理記者として大半を過ごしました。「記事を生かすも殺すも整理記者次第」が少しわかりかけてきたころに定年となりました。

研修を終えて読売新聞北海道支社に赴任したのは1966年4月26日です。上野駅から列車と連絡船で

札幌に着きました。「今度の新人は青山だってよ——。花束をいっぱい抱えて、軟弱なヤツらしいぜ」という余計な話が若手の多いサツ回り（新聞社の警察担当）へ瞬く間に広がりました。原稿受けの内勤を2か月ほどで終え、実戦のサツ回りに配属されました。

初めて臨場したのは、定山溪です。山菜採りの高校生が70m崖下に転落した現場でした。すでにロープで高校生を引き上げる救出の真っ最中。私も一緒にロープ引きを手伝い始めるとジープの運転手さん（10歳は年上）から、「シタラさん、何やってるんだよ、いま写真を撮らなきゃだめじゃないか!」との大声。なるほど「知らせる仕事」を忘れていました。高校生も無事に救出。これが特ダネとなって北海道社会面に初めてトップを飾りました。特ダネとはタイミングでもあります。次は冬の丑三つ時、サツ回りの帰途、アパート玄関わきから石炭ガラがくすぶっているのを発見。ジープ



を止めて今度は撮影に徹しようと思守っていたら、火の手が上がり始め火事目の状況に。あわてて、ドアをたたき住人を起こし事なきを得ました。原稿にはならずじまい。仕事、と人情、を新人としてたたき込まれた教訓です。

取材に熱が入るほどつい横柄になり鼻持ちならないブン屋にもなりかねません。自分が見てもイヤなものです。退職後、全国に80以上の病院を抱える恩賜財団本部広報室長として赴任した時、厚生省OBの理事から「元新聞記者という雰囲気ではありませんね」との言葉。含みもあるのでしようが「ブン屋あがり」としてはうれしく受け取りました。

(元読売新聞記者)

前同窓会副会長'66年卒)

シェイクスピアから愛の花束を(8)

“They do not love that do not show their love.”(大意:愛情をはっきり表現しないのは心から愛していないということだわ。)

シェイクスピア初期の喜劇『ヴェローナの二紳士』で、ヒロインのジュリアが侍女に語るせりふです。ジュリアは恋人プロテュースが求婚の意思を示さないため心乱れています。侍女は、“O, they love least that let men know their love.”(愛を見せびらかす人が情愛深いわけで

はないのですよ。)とジュリアをたしなめます。恋心ははたして秘するが花でしょうか?

この喜劇は失敗作といわれ、上演も少ない作品です。ジュリアと相思相愛のはずのプロテュースが親友ヴァレンタインの恋人シルヴィアを手に入れようと親友をあざむく策を弄すること、にもかかわらずヴァレンタインがプロテュースへの友情の証にシルヴィアを彼に譲ろうとすることなど、ピンとこない点が多々あります。もっとも恋人たち男女4人の惑いにみちた

青春を描いたロマンスと考えれば、荒唐無稽な筋立てもかえっておもしろく感じられます。

それにこの芝居はシェイクスピア一流の名せりふにも事欠きません。その証拠に、シューベルトの「シルヴィアに」という歌曲をご紹介します。原詩は「シルヴィアとは誰、みんなが彼女をたたえるけれど」と始まる、シルヴィアに捧げられた劇中歌です。シューベルトはドイツ語訳に作曲していますが、シェイクスピアの言葉がかのウィーンの歌曲王の心をも魅了したのでしょうか。一聴されたし!

佐久間 康夫 比較芸術学科教授 ('82年院修了)